少年少女日本文学館 21

雪三景・裸の王様

yukisankei
mizukami
tsutomu

hadakano
ōsama
kaikō
takeshi

ゆきさんけい　はだか　おうさま

水上勉（みずかみつとむ）

開高健（かいこうたけし）ほか

少年少女日本文学館 21

雪三景・裸の王様

水上勉 開高健（ほか）

講談社

913

水上 勉　曽野綾子　辻 邦生　竹西寛子
開高 健

少年少女日本文学館　21

雪三景・裸の王様

講談社　1987

294 p　23cm

内容：秋末の一日　母一夜　雪三景　落葉の声　咎い　婪り
神馬　裸の王様

みすかみつとむ　そのあやこ　つじくにお　たけにしひろこ　かいこうたけし

少年少女日本文学館
第二十一巻　雪三景・裸の王様

定価はカバーに表示してあります

昭和六十二年三月十五日　第一刷発行

著　者……水上 勉　曽野綾子　辻 邦生　竹西寛子
開高 健

発行者……野間惟道

発行所……株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一
郵便番号　一一二
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）

印刷所……株式会社廣済堂

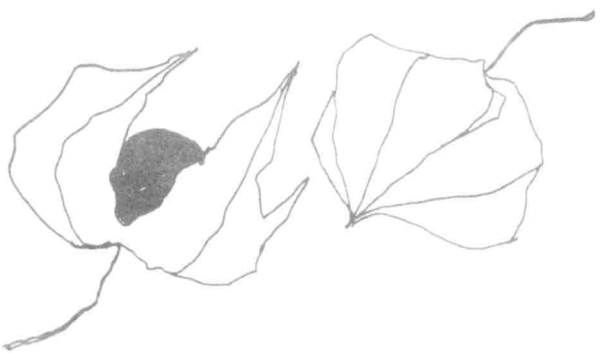
製本所……藤沢製本株式会社

©水上 勉　曽野綾子　辻 邦生　竹西寛子
開高 健　昭和六十二年

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にておとりかえします。

Printed in Japan
ISBN4-06-188271-6 (0)　（児企）

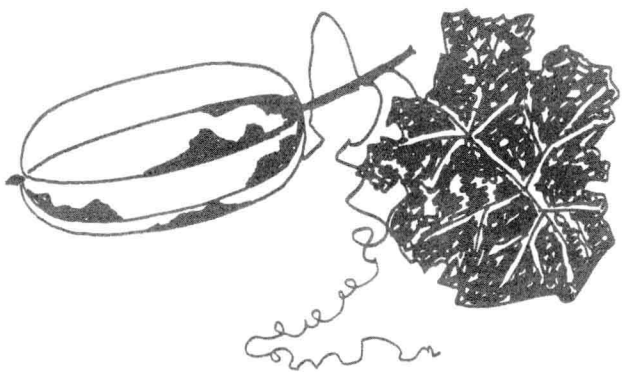
もくじ



水上　勉
秋末の一日……9
母一夜……36
雪三景……51
曽野綾子
落葉の声……83
辻　邦生
咨い……113
婪り……124

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

竹西寛子
神馬……137
開高　健
裸の王様……149
●解説――進藤純孝……262
●随筆――大岡　信……269
●略年譜……276



◆この本の本文表記について

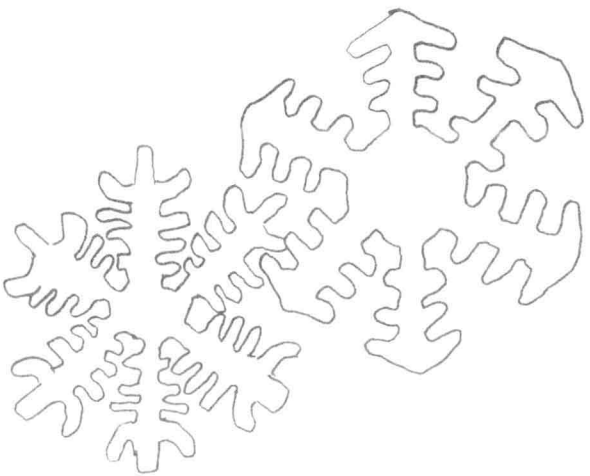
●現代かなづかい、現代送りがなを使用した。

●極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損なうおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。

●本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合は左側にルビをそえた。

●さらに説明を必要とする語句や事項には、＊をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

雪三景（ゆきさんけい）・裸（はだか）の王様（おうさま）



水上勉（みずかみつとむ）

秋末の一日（あきずえのいちにち）

母一夜（ははいちや）

雪三景（ゆきさんけい）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

秋末の一日

若狭の弟から電話で、母がこけて寝こんだといってきた。こけてというのは、ころんだという意である。母がどこでこけたか、どこでそうなったか、弟はふれずに、寝こんだきり起きあがれず、小便も久枝がとっている、といった。久枝は弟の妻である。嫁に小便の始末をしてもらうほどなら、よほどの怪我か。母は戌年うまれだからことし八十一になる。

私の生家(生まれた家)はこけて寝ているその母と、弟夫婦と、高校へ行っているその娘の四人ぐらしだった。長患いしていた(長いあいだ病気をして)父が九年前に死に、母は看護から解放される(自由になる)と、急に生気(いきいきした勢い)が出て、野良(田畑)へも出るほどだったが、死んだ父の齢(年齢)の八十三に近づく年まわりにきて、少しずつ弱りを見せ、足が

いくらかひょろつく様子だと弟はつたえていた。弟は物置から古い乳母車をだして母にあたえ、村道を歩かせる練習をさせている、といった。乳母車を押していると、ささえになってひょろつかぬ、というのだった。それらのことは、みな電話でだった。

私は東京で、母が乳母車を押して歩く姿を想像していた。乳母車は、高校へ行ってる孫娘の使ったものだから古いものにちがいなかった。たぶん母は、その車に荷はのせず、空のを押しているにちがいなかった。母は背がひくく、腰がまがっていた。肉づきはいいほうで、顔もはれあがったように丸かったが、めっきりうすくなった白髪を、頭のてっぺんで結わえ、無口な気性(性格)をあらわす、口もとのしまった表情で、空車を押してゆく姿は、私をいくらか明るい気分にさせると同時に、またいくらか淋しくさせた。

生家のことは弟にまかせきりで私は東京にいた。父の長患いしていた晩年(年をとってからの時期)も、その父が死ぬ時も、臨終(死ぬまぎわ)に間にあわなかったぐらいで、親不孝な兄といえた。

「こっちへくる用事がないかね」

と弟はきいた。何かのついでに京都へでも来たら、歩をのばして(ついでに寄って)見舞ってやってくれ、という意(わけ)だった。弟はいいたいことを端折(短くして)っていうくせがあった。これも母に似ていた。

「小浜へゆく日があるからその時寄るよ」
と私はいった。小浜は、生家の村からふたつ目の駅で、若狭の中心都市だった。そこの文化会館で私の芝居が上演されるのを機に、地元の劇団員が会合を計画していた。私は出席の返事をだしていた。母がこけて寝ているとは知らなかったので、会合がすんだら、宿へ弟をよんで夕食ぐらい共にしようと考えていたのだが、電話で気がかわった。もちろん、母に会いたかった。私は芝居のはねる時間と、会合の場所を教えて電話を切った。

十一月半ばのよく晴れた日だった。私は東京を発って、小浜駅に五時すぎに着き、駅前通りから程近い新開地に建った文化会館にゆき、そこで六時からはじまった芝居を観て、はねた時刻に、会館の控え室前で弟を待った。弟は出口へ流れてゆく観客に逆行し、こっちへやってきた。芝居を観たのか、と問うと、少しおくれて入場したので、三分の二ぐらいしか観れなかった、といってから時計を見、

「もうおそいでお婆ん寝とる。あしたの朝に来てくれんか」
といった。会合を約束している地元劇団の若者らも控え室にいた。
「そうなら都合がええ」

と私はいった。海岸の古い宿がその会合場で、泊まる手筈もととのえられていた。私はこの時、ちょっと弟の顔を見た。弟は三分の二だけ芝居を観て、生家のある村にひとりで帰るのだった。私だけ小浜に泊まることのうしろめたさが走った。母はよく私が若狭へきても、町の宿で泊まって生家で泊まらぬことを淋しがっていた。地元劇団が宿を契約しておいてくれたにしても、会合をすませば用がなくなる。生家へ帰って、母の寝ている離れでなくても、離れへ通じる廊下手前の母家座敷で泊まった方が、かりに母は深夜で気づかなかったにしても、朝は機嫌がいいだろう、そんな思いがしたものだから、

「お前は車だろ」

と弟にきいた。うん、と弟はこたえて、すぐ、

「あした朝、迎えにきてもよいよ」

といった。生家に泊まるとしても、これからではまた久枝が茶の用意をしたり、床をとったりごたごたするだろう、との気持ちも弟の顔に出ている。私はそれをいいことにし、

「そんなら、あしたは、タクシーで早くゆくよ」

といって、弟を生家へひとりで帰した。弟が出てゆくのを見送りつつ、こんなことは時々あっ

（前もってしておく準備）
（気がとがめること）
＊離れ（四ページ）
（ふとんを敷いたり）

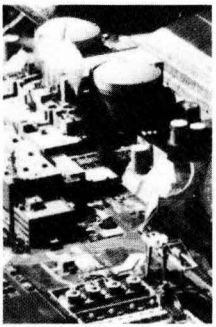
たな、と思った。小浜へはちょくちょく来た。芝居は今回だけでなく、二、三ど会館で上演されていたし、それが東京の劇団だと一座の宿が設けられ、そこで泊まるのも楽しいのだった。芝居でなくても、講演などできても、招いた先が宿を用意していた。そっちもことわりきれない私の性分であった。で、生家の村近くまで来て、母の顔を見ずに帰ることはしばしばだった。それは、私が多忙なせいだった。父が死んでから、ひっそりとくらす母が、孫とのしずかな陽だまりを見つけ、やすらかに日をすごす姿は好ましく、時には足の運動で空乳母車を押して村道を歩く姿も見たい思いはあったが、それも五回の帰郷に一、二どあるかなしで、すぐ東京へ飛び帰る日が多かった。

地方劇団との座談会は一時間ぐらいですんだ。宿は小浜湾に面した馴染みのS館だった。岸すれすれに建ったその宿の裏は海になっていた。劇団員が帰ったあと、ひとりになって、窓のカーテンをひらいて夜の海をながめた。

遠くに鼠いろの半島が、牛が一頭寝たように沖へつき出ていた。手前に島のようにもりあがった小さい岬がある。その半島と岬のあいだの空がほの明るいのは、そこに生家の村（いまは町制となった大飯）があるからだった。私の生家は、海岸駅から一里ほど山へ入ったところにあった。い

離れ（一二ページ）
離れ座敷の略で、主人や家族の住む母屋から離れた座敷。

原子力発電所
ウラニウムやプルトニウムの原子核分裂のさいに発生するエネルギーを利用して、電力を作る発電所。写真は福井県の大飯原子力発電所。



ちりめんじわ
縮緬のように細かなしわ。縮緬は絹織物の一種で、よりのないたて糸とよりの強い横糸で織った布地を、ソーダをいれた石鹸液で煮て細かなしわを作ったもの。

ま、その部落へ向かう細道を、弟が運転する小型車が走ってゆくのが想像されると、闇の中に沈んだ部落の全景がひろがった。ほの明るい空の下で、生家の村は岬にかくれ、ひろい錫いろの海がこっちへのびてくる。十一時すぎた時刻だから、舟影はなく、遠い半島の原子力発電所にだけ赤い灯がともっていた。灯の下の海はそこだけ*ちりめんじわをみせて、燈影を長くひいている。

大飯原子力発電所は、原発銀座といわれた若狭に九つある発電所のうちもっとも大きく、弟のはなしだと大阪市が一夜消費する電力を、一日でつくるということだった。科学にうとい私は出力百何万キロワットときいても、力の量はわからなかった。むしろ、それが、世間が注視する原子力の平和利用の先端をゆくものといわれ、安全対策がきびしく要求されているにもかかわらず、私が東京を出る前日の全国紙には、係員がバルブ一個をまちがえて締めていたことから、多量の冷却水が漏れていて、幸い空焚きのような現象はま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com